

＜現地からの報告＞ スリランカにおける内戦終結について

大岩は、5月13日深夜にスリランカに着きましたが、予想もしない急な展開となり、最終的には、18日に、LTTEの最高指導者のプラバーカランと上級幹部2人が、政府軍との交戦で射殺されたとテレビ、ラジオが伝え、30数年に及ぶ内戦が終結しました。テレビ報道等を通して見聞きした情報によれば、19日までの事態の経過は以下のとおりです。

14日には、干潟に橋が作られて、2万人もの住民が大挙して逃げてくる様子でLTTEが立てこもっている方角での3回にわたる大爆発で火柱が立っている画面がテレビのニュースで映し出されました。それまで、住民は軍が設置した太いロープをつたって、干潟の浅瀬を腰までつかりながら渡って避難しました。干潟をはさんで海岸部分の狭い回廊にLTTEは住民を連れて逃げ込んでいたのです。4月の中旬以降のテレビや携帯電話への情報では、LTTEが住民の避難を阻止しようとして、背後から一斉射撃をしたところ、あるいは見せしめに13歳の男の子の両足をなたで切り落としたりした場面が報道されたと聞きました。携帯電話には、その都度、情報が入ります。私がスリランカで使う携帯にもLTTEの動向が入ってきていました。また、この14日のテレビでは、LTTEが4キロ四方に追い込まれたと報じていました。

15日には、ヨルダンでのG11の会議に出席していたラージャパクシャ大統領が同国に出稼ぎに来ているスリランカ人を前に、「欧米の2、3の国は、戦いをやめて停戦を受け入れよと政府に勧めるが、政府は決して妥協はしないし、テロ集団であるLTTEに1インチたりとも土地を与えない。戦いは48時間以内に終わる。私は平和になった国に帰る。」と宣言した場面がテレビで流されました。この外国からの働きかけについては、イギリス、フランス、スウェーデン、といったヨーロッパ諸国、そしてアメリカも、停戦するように大統領に提案し、日本も明石代表がそのように勧めたと聞いています。過去に5度もLTTEと停戦をして、その都度、裏切られてきた経緯があるため、今回は、LTTEが武器を棄てて出てくるまで戦うと大統領は決しており、諸外国の提案に耳を貸しませんでした。最終的には、日本も政府の対応に理解を示したとされ、16日には、テレビの画面を通して、大統領の弟が、国防長官として、記者団に、ロシア、中国、ベトナム、そして最後に日本がスリランカ政府の考えを支持したという声明を発表している姿が映し出されました。

17日の未明には、LTTEの最高指導者プラバーカラムの息子と幹部の数人が射殺され、そのとき彼らは大量の金を持って逃亡しようとしていたとして、その画像が流されました。そして、同日の午前10時ころのテレビでは、マヒンダ・ラージャパクシャ氏が、内戦の終結というスリランカの歴史の中でも特筆すべき偉業を成し遂げた大統領として帰国し、空港において、仏教、カトリック、ヒンドゥー教、イスラムの宗教指導者に迎えられて祝福を受け、出迎えの政府要人から大歓迎を受けている場面が生中継で流されました。そのときの大半のスリランカ人の疑問は、本当

に終結したのか、そうならどうしてLTTEの最高指導者プラバーカランのことが報道されないのかという点にありました。この疑問には、翌日の報道が答えました。

18日、私は、午前中、車で大学のあるパンバヒンナに移動していたのですが、その途中で爆竹の音を聞き、何かあったと察しました。ちょうどその時、同乗していた青年の携帯に情報が入り、プラバーカランの死を知りました。ワゴン車を運転していた私の古くからの友人、ダルマさんは、大感激し、彼こそは真のラージャ（シンハラ語で王様という意味）であるとラージャパクシャ大統領を褒め称えていました。スリランカでは、お祝い事があると、爆竹を鳴らす習慣があり、若者が爆竹を買い求めて交差点のようなところで破裂させて喜びをそれこそ爆発させます。昼食のために立ち寄った友人の家のラジオは、LTTEが800m四方に追い詰められ、プラバーカランとNO2のスセイ、NO3のポットアンマールの3人が救急車に隠れて逃亡しようとし、軍の制止を振り切って逃げたために、一斉射撃を受け射殺されたと報じていました。午後2時ごろのことです。明日19日の午前9時に大統領が国会で報告するので、それを聞けばすべてが明確になるはずだというのが皆の感想でした。

19日、午前9時50分ころから、大統領の演説が始まり、10時半に終わりました。大学でもテレビを見るように指示が出され、多くの教職員が食堂のテレビの前に集まりました。私もテレビの前に行き演説を聞きました。出だしの部分は大まかな経緯の報告であり、シンハラ語とタミル語で行われました。それ以降は、シンハラ語での演説でした。印象に残ったのは（というより私がはっきりわかったのは）、4箇所でした。まずは、タミル人が多く居住し、戦争の被害を受けた北と東の復興には政府が全責任を持って真摯に対応するとした点、また、スリランカはシンハラ、タミル、ムスリムの多民族国家であるが、今では2種類の民族しかなく、ひとつは国を愛する多数の民族と他は国を愛さない少数の民族であると述べたこと、さらには、今回の解決はスリランカ人が自らの考え方と方法で行ったものであり、諸外国の言いなりにはならなかったことを誇りに思うべきであり、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教の各宗教の「法」に従った解決法であり、世界に類を見ないテロ対処法であると強調した点、最後には、この戦いで多くの若者の血が流され、両親の悲しみ、人々の悲しみはいかばかりであったか、こうした戦いを二度と起こしてはならないと訴えた点の4つです。

19日の昼のテレビでは、射殺されたプラバーカランの死体が映し出され、完全に内戦が終結したことを告げていました。スリランカでは、こうして死体をテレビの映像で見せることは日常茶飯事のことです。特に憎しみが強いというわけではありません。遺体の写真を撮ることに抵抗はなく、葬式に出るとむしろ写真を撮ってくれといわれます。

上述の大統領の言葉が真実であり、実際にその言葉どおりに政策が実行されれば、真の平和がスリランカにもたらされると思います。何の罪もない住民を巻き込んだ「人間の盾」で最後の抵抗を試みたプラバーカランのLTTEに対して、今回の政府軍が、住民の救出を第一に考えていたことは事実であろうと、私には思えました。この点が、大統領の言う「法」に基づく解決行動ということではないかと思えます。

さらに、大統領が犠牲を覚悟で解決を急いだかにみえますが、これにはインドの総選挙が関連しているとの話しです。インド政府は LTTE に対する軍事的制圧を止むを得ないこととして支持していましたが、今回の総選挙において負ければ、LTTE を支援する政権が生まれる可能性がありました。総選挙の結果は 17 日に判明することになっていました。この 17 日までに LTTE を壊滅させたかったというのが、大統領の本音であったろうと言われていています。インドの政治状況では、南インドのタミル人の故郷であるタミルナド州の地方政党の動向が大きく左右すると言われていています。今回の選挙では、タミルナド州の野党の立場にある政党が、スリランカの LTTE 支配下のタミル人を助けるためにインド軍を派遣すべきであると訴えていました。もし、野党が政権をとれば、この主張が受け入れられる可能性が高く、スリランカ政府は窮地に追い込まれる可能性がありました。そこで、選挙結果の出る前に決着をつけようとしたというのです。総選挙の結果は、与党が圧倒的な勝利を収め、タミルナド州でも与党と連携するタミル人政党が大差で勝ち、LTTE の支援を意図した野党政党は大敗し、LTTE の影響は全くなかったという結果に終わりました。大統領にとっては杞憂に終わったわけです。

このようにスリランカは南インドの動向に大きな影響を受けます。タミル人はスリランカ内では少数派ですが、インド圏全体から見れば多数派であるといわれる所以がここにあります。シンハラ人はスリランカ内では多数派なのですが、南インドを視野に入れば少数派に転落してしまうのです。ここにシンハラ人の危機感があります。タミルの国がスリランカ内にできたら、自分たちは追い出されて海の藻くずと化すしかないというわけです。このように捉えてくると、多数派のシンハラ人が少数派のタミル人を差別し抑圧しているという主張は、単純すぎて、簡単には了解できることではないと思われます。今まで、欧米諸国はどうもこの主張を鵜呑みにしてきたようです。変化したのは 2001 年の 9.11 のアルカイダによるテロ行為でした。これ以降、アメリカは LTTE をテロ集団と位置づけ、2007 年にはヨーロッパ諸国もこれに追従しました。しかし、あくまでも LTTE 支援の姿勢に変わりがないことは、フランス、イギリスの停戦働きかけに顕われています。イギリス植民地時代、スリランカの中で、タミル人は優遇されてきました。イギリス植民地支配の巧妙なところですが、スリランカにおいてシンハラとタミルとの協調連合を阻止しようとしたと言われていています。つまり、両民族は仲たがいをさせられていたというわけです。こうした植民地支配の負の遺産をどう乗り越えるかが今後のスリランカの平和にとって重要な課題であろうと思われます。真に自立した国家にならなければならないという思いがマヒンダ・ラージャパクシャ大統領にあり、国を愛する民族という表現になったと言えるのではないのでしょうか。